

東北大学川内キャンパスの 地中に眠る陶磁器

仙台城跡二の丸地区・北方武家屋敷地区の調査から

東北大学埋蔵文化財調査室

東北大学川内キャンパスは、仙台城の二の丸跡と、その北側の武家屋敷跡の遺跡の上に位置しています。二の丸は、政宗の死後、二代藩主伊達忠宗によって造営され、その後の仙台藩の政務の中核として幕末まで機能していきます。北キャンパスの武家屋敷跡には、家臣の屋敷が区画され、重臣の屋敷跡も存在します。

川内キャンパスは、これまでに30地点以上の発掘調査が行われ、仙台城の二の丸跡と武家屋敷跡で使われていたさまざまな種類の遺物が出土しています。ここでは、発掘で出土した陶磁器について、これまでの研究成果からわかってきたことをご紹介します。

・★印の遺物は、東北大学萩ホールで展示しておりますので、実物をご覧ください。



江戸時代初期の陶磁器（17世紀初めから中ごろまで）

仙台城に二の丸が造営される前の時期。川内南キャンパスには、伊達政宗の四男宗泰の屋敷があったとの伝承があります。また、政宗の長女五郎八姫の帰仙に伴い、宗泰屋敷の北側に、西屋敷（五郎八姫の屋敷）が造られます。

二の丸地区第9地点（現：文・法合同研究棟） 7・8層、16号溝出土陶磁器



二の丸地区から出土した江戸時代初期の陶磁器です。16号溝は、調査結果から、伊達宗泰屋敷の北側を区画する溝と考えられます。

磁器の出土は少なく、全て中国磁器（1～3）です。1は蓮池に水鳥文を描いた皿です。何枚か組で出土しています。

陶器では、唐津焼（佐賀県）の製品が多く、中でも、向付（7・11・12）は、同じ絵柄の組や、絵交わりの組み合わせが出土しています。他にも碗、皿、播鉢、片口鉢（10）など、色々な器種が出土しています。次に多いのは、瀬戸・美濃（愛知・岐阜県）の陶器です。織部の向付、志野の丸皿（4）、志野織部の丸皿（6）、天目碗（5）、播鉢（9）などが出土しています。8は「呂宋壺（るそんつぼ）」と呼ばれる壺です。実際には呂宋（フィリピン）で作られたものではなく、中国南部産の壺が呂宋を経由して日本に持ち込まれたものです。唐物茶壺を鑑賞所有することが隆盛した時代をよく示した遺物です。

武家屋敷地区第7地点（現：マルチメディア棟） 14号土坑出土陶磁器



武家屋敷地区から出土した江戸時代初期の陶磁器です。二の丸造営前の時期のため、この場所がどれだけの規模で武家屋敷が整備されていたのか、絵図などの手掛かりがない時代です。江戸時代初期の陶磁器は、武家屋敷地区から多くはないものの出土しています。そのため、何らかの形で武家屋敷の整備は始まっていたものと推測されます。

磁器（1～5）は、輸入磁器ばかりです。1～4は中国の磁器です。2は漳州窯系（中国福建省）の芙蓉手と呼ばれる文様の大皿です。3・4は、唐人山水文が描かれています。5はベトナム磁器の安南染付と考えられます。白い上薬を掛けて、磁器の白さを出すのが特徴の一つです。

陶器（6～8）は、瀬戸・美濃のもので、6は天目茶碗です。7の丸皿は、口縁部に煤が付着しており、灯明皿として明かりを灯す皿に転用されたことがわかります。8は播鉢です。

江戸時代中頃の陶磁器（18世紀前半ごろ）

二代藩主忠宗によって寛永15年（1638年）からこの丸造営が始まります。その後、四代藩主綱村により、西屋敷があった区画を取り込んで、二の丸が改造され、中奥が拡張されます。18世紀前半は、二の丸大改造後の時代です。

武家屋敷地区第7地点 （現：マルチメディア棟） 2号遺構出土陶磁器



武家屋敷地区で発見された巨大なゴミ穴から出土した陶磁器です。享保（18世紀前半）の年号が書かれた大量の木簡が出土しています。木簡の内容から、これらの陶磁器は二の丸内で使われたものが、武家屋敷地区のゴミ穴に運ばれて捨てられていたことが判明しています。

磁器は、ごく一部、中国製品（10）が含まれる以外は、肥前産（佐賀・長崎県）になります。「くらわんか手」と呼ばれる厚手で安価なもの（3・12）から、非常に繊細な絵が描かれた碗や皿（4・7～9・11）も含まれています。元々がゴミ穴に捨てられた遺物なので、残念ながら完全な形のものほとんどありません。8～10のような大皿も、隙間の破片は見つかっていません。8の大皿は繊細な絵と濃淡で葡萄の茂みの中に鹿を描いた優品です。庶民の屋敷からはなかなか出土しない、二の丸ならではの磁器です。

陶器は、相馬（福島県 15～17）、京・信楽（京都府・滋賀県 18・19）、肥前（21～23・27）、瀬戸・美濃（24・26）、東北産（25・29）など、各地の陶器が入ってきていた時期です。相馬の陶器は、創業からほどない段階で、大堀相馬、小野相馬での器種や特徴がまだ明確に確立されていません。播鉢や甕など大型品を中心に、地元の地方窯で焼かれた陶器がこの頃以降、多くなっていきます。

20の天目茶碗は油滴状の光沢のある釉で、中国のものと考えられます。京焼き（18・19）は、色絵の鮮やかな上絵付けの製品です。24は、瀬戸・美濃産の掛け付け碗と呼ばれる陶器です。大堀相馬では、これを真似した製品を作るようになります。

江戸時代後期の陶磁器（18世紀後半ごろ）

江戸時代後期は、冷害や自然災害による飢饉が全国で頻発しますが、仙台藩もその例外ではありませんでした。冷夏、干ばつ、大雨による河川の氾濫などにより、凶作が続く、藩は財政難に陥る時期でもあります。

二の丸地区第9地点（現：文・法合同研究棟） 15号土坑・16号土坑出土陶磁器



15号土坑、16号土坑は、二の丸地区で発見されたゴミ穴です。18世紀後半ごろの陶磁器がまとめて出土しました。磁器は、18世紀前半ごろと変わらず、肥前の製品がほとんどで、薄手で緻密な絵が描かれたものから、安価品（2・3・15・16）までが出土します。人物が描かれた皿（7）は中国製です。作られたのは17世紀前半ごろで、漆で補修した痕跡があり、永く使われたことがわかります。

陶器は、相馬の陶器がかなり多くなります。大堀相馬は碗や皿を中心に（22・27・28・30・31・34～37、40・41）、小野相馬は片口鉢、鬢水入、皿、灰吹などを主に（20・29・39）、作る器種やその特徴の違いが、前段階よりも確立されていきます。相馬の陶器生産が拡大したことによって、肥前や瀬戸・美濃の陶器の比率は少なくなりました。京焼きの陶器（24・25・32・33）は、高級品としてのブランド力があり、一定程度含まれています。

20・21は、灰吹（はいふき）といって、キセルの灰を捨てるための陶器です。キセルの雁首を口に打ち付けて灰を落とすため、口縁部が欠けているのが特徴です。

38・39は、整髪の際に鬢水（びんみず）という整髪料を入れるための器で、鬢水入（びんみずいれ）と言います。櫛を入れやすいように細長い形になっています。

陶器を焼く地方窯が多数できるようになり、播鉢など

の大型品を中心に、東北産と考えられる陶器が多くなります。その中には、仙台の堤焼きも含まれているものと考えられますが、江戸時代の堤焼きの具体的な特徴が未だ不明なため、確実なところはまだわかりません。

東北大学埋蔵文化財調査室ウェブサイトはこちら

→ <http://web.tohoku.ac.jp/maibun/>

・各調査地点の詳しい成果は、『東北大学埋蔵文化財調査年報』、『東北大学埋蔵文化財調査室調査報告』にまとめております。

・報告書は、図書館で閲覧できます。東北大学機関リポジトリ

からもダウンロードできます。→ <https://tohoku.repo.nii.ac.jp/>

・全国遺跡報告総覧からダウンロードもできます。

→ <http://sitereports.nabunken.go.jp/ja>